

子どもの健康と環境に関する全国調査(エコチル調査)

論文概要の和文様式

雑誌における論文タイトル:

Prevalence of infectious diseases in preterm infants: a 2-year follow-up from the Japan Environment and Children's Study

和文タイトル:

早産での出生と2歳までの感染症罹患との関係

ユニットセンター(UC)等名: 富山ユニットセンター

サブユニットセンター(SUC)名:

発表雑誌名: Scientific Reports

年: 2022 DOI: 10.1038/s41598-022-26748-0

筆頭著者名: 田村 賢太郎

所属 UC 名: 富山ユニットセンター

目的:

本研究では、早産で出生した児は、正期産で出生した児と比較して、小児に一般的な感染症に罹患しやすいかどうかを明らかにすることを目的とした。

方法:

エコチル調査に参加した妊婦から産まれた子どものうち、多胎や死産、過期産児などを除いた 67,828 人を対象とした。在胎週数から早産児と正期産児に群別し、1 歳および 2 歳時の各種感染症罹患歴(上気道炎、下気道炎、RS ウイルス感染症など 12 項目)を比較した。母体因子の他、母乳育児、集団保育、パリビズマブ(抗 RSV モノクローナル抗体)を調整変数として、多重ロジスティック回帰モデルを適用して解析した。

結果:

母に関連する因子および母乳育児と集団保育で調整すると、早産児の下気道感染症罹患のリスク比(95%信頼区間)は、1 歳時 1.21(1.05-1.41)、2 歳時 1.27(1.11-1.46)と有意に高かった。しかし、パリビズマブ投与を調整変数に加えた解析モデルでは、下気道感染症の罹患に有意差はなくなった。また、母および児に関連する因子で調整後、早産児では 1 歳までの突発性発疹症と中耳炎の罹患リスクが正期産児に比較して小さかった。その他の感染症に有意差はなかった。

考察(研究の限界を含める):

RS ウイルスは、乳幼児の下気道感染症の原因として最も多いウイルスの一つである。早産児に対するパリビズマブ投与は、早産児の下気道感染症罹患リスクを正期産児と同等程度に下げる効果が示唆された。また、その他の一般的な小児感染症に関しては、早産児が正期産児と比べて罹患リスクが高いことはなかった。本研究の限界として、感染症の重症度や入院率は評価できていないこと、より在胎週数の小さな早産児の罹患リスクに関する検討ができなかったことが挙げられる。

結論:

早産で出生した児は、正期産で出生した児と比較して、1 歳および 2 歳時の下気道感染症の罹患リスクが高いが、パリビズマブ投与後のリスクは同程度となった。